

「空白」と「記憶」

ウクライナ飢饉と歴史認識

下斗米 伸夫

Shimotomai Nobuo

日本ではあまり知られていないが、今から75年ほど前の1932-33年、ソ連のウクライナ共和国で飢饉が生じた。この結果、数百万もの農民が犠牲となり、飢餓線におかれた。ちょうど世界恐慌のおり、スターリンが社会主義の勝利、第1次5ヵ年計画を期限内に超過達成したと宣伝した頃である。対外的にはルーズベルト米政権との国交回復や反ファシズムの線で欧米に接近しようとした時期であった。このこともあり、この飢饉の事実は当時外部にはひた隠しにされた。

なかにはフランスの作家アンドレ・ジッドのようにこの悲劇を告発した人もいた。だが欧米世論もまたこの事実を知らなかったか、あるいは『ニューヨーク・タイムズ』紙のW・デュランティ特派員のように、知っていてもソ連との国交回復をはかる目的もあって黙殺した。

こうして冷戦期には、数百万に達する飢餓の事実があったかどうか東西対立のひとつの争点ともなった。それでも国民の記憶を完全に抹殺したり、事実を隠蔽することはできるものではない。ソ連時代でも、大胆な農村派と呼ばれる作家たちがこの飢饉を部分的だが書くようになった。そしてゴルバチョフ政権下で、歴史の空白を埋めるということで過去の見直しを図る頃からは、この問題でも本格的論文が現われだした。ロシア時代になると『ロシア農村の悲劇』などといった資料集も出て、タブーはなくなったかに思われた。

ところが近年、この飢饉は新しい国際紛争の種となっている。それはウクライナとロシアとがこの事実をめぐる歴史認識を争っているからである。とくにウクライナ政府は、このところ、この飢饉がスターリンによってウクライナ民族とその文化の抹殺を図ろうとしたジェノサイドであるとして、2008年11月22日には、そのウクライナ語で「ホロボモール」という飢饉犠牲者追悼の記念行事を行なった。この「ジェノサイド」を否定することを禁じる法律まで出した。

これに対しロシアのメドベージェフ大統領は、11月14日に声明を発表、この飢饉がスターリンによる全ソ連の農民を抑圧するものであったが、決してその対象はウクライナ人に限るものではなかったとして、民族「ジェノサイド」であるという認識を否定、記念行事への参加をことわった。こうしてソ連の後継国家であるロシア

とウクライナとの間で、この飢饉をめぐる対立は激化している。

歴史認識をめぐる対立と「歴史」の政治利用

この飢饉の認識をめぐっては、かつて「西側」、とくにウクライナからの亡命者の歴史観も投影されていた。ハーバード大学のウクライナ研究所は、ウクライナ人の聞き取りなどを中心に史料を収集、これを基に1980年代、ソ連史家であるロバート・コンクエスト氏が『悲しみの収穫』（邦訳＝白石治朗訳、恵雅堂、2007年）を著し、そのなかでこの飢饉がウクライナ人を対象とするスターリンによる抑圧であった、といった主張を展開した。

ペレストロイカのもとで歴史認識が自由化され、ソ連期の過去について新しい認識や表現が許されたとき、このような認識が逆輸入され、ウクライナの科学アカデミー歴史研究所などの歴史家たちの間でも流行し始める。

同時に、このような歴史認識はソ連崩壊をめぐる民族主義の高揚のなかで利用された側面もある。確かに、第2の人口を抱えるウクライナが反モスクワの意図を明確にした1991年末、ソ連は崩壊した。その後、ウクライナ政府はこの認識をさらにエスカレートさせ、飢饉はスターリンによる「民族虐殺」であるという主張にまで高めてきた。このような認識には、さすがのコンクエスト氏も反対しているという。

本当にスターリンにはウクライナ民族を抹殺する意図があったのだろうか。少し歴史を調べると、当時ウクライナだけでなく、ロシア南部、ウラル、ボルガ沿岸、そして中央アジアのカザフスタンなどでも大規模な飢饉があったことが知られている。飢饉はすべての農業地域に及んだ。遊牧民族であったカザフでは人口の半分がこの犠牲となった。

実はこの問題では、日本の歴史家にも発言権がありそうだ。ちょうどコンクエスト氏がこのウクライナに関する本を書いて出版した1980年代、日本の学者もまた、ソ連の1930年代研究、とくにスターリンの集団化から飢饉に至る過程について関心を抱いていた。世界の学会でも、オーストラリアの歴史家スチーブ・ウィートクロフト氏などと並んで最初にこの論争に火つけたからだ。

なかでも東京大学の奥田央氏はロシアのボルガ流域に関する飢饉の本『ヴォルガの革命　スターリン統治下の農村』（東京大学出版会、1996年）を書いた。小生もまた北カフカース地方の飢饉であるクバン事件について、1980年代に英文の論文をいくつかの国際学会で発表したことがある。

実際、スターリンはそれまで農業国であったソ連を重工業化し、軍事的にも強化を図ろうとした。しかし投資も外貨もない。そのための犠牲となったのが人口の8割を占めていた農民たちであった。農民に対して集団化をおしすすめ、このために最も精強だった農民たちを「クラーク」（富農）として弾圧、穀物を取り上げたこと

がこの広範な飢饉につながったのである。穀物を飢饉輸出し、工業製品、兵器や機材を買い込んだためだった。

この悲劇は戦後も繰り返され、1946年にも「フランスの労働者」を救うためと称して穀物が飢饉輸出され、100万単位の餓死者が出た。こちらには米国に対抗する核開発という新たな要因も絡んでいた。核開発と飢饉ということ言えば、1950年代末の中国での飢饉、そして1990年代半ばの北朝鮮の飢饉も決して「自然災害」ではなく、独自の核開発への動きが悲劇を生んだ。

ロシアで始まった史料公開・編纂の動き

ウクライナ政府の主張はこの文脈からみると「半真実」でしかないだろう。餓死者の数の特定は当時の人口センサスなどの不備で困難を極めるが、ソ連の穀倉であったウクライナ農民が数百万人規模で飢饉線上におかれたことは間違いない。この結果ウクライナの民族と文化とが抑圧されたことも真実だ。だがそれは結果であって原因ではない。少なくともウクライナの歴史家を含め、スターリンのこのような明確な言明を文献は示していない。

しかしこのような「半真実」が大手を振って国際政治に影響しているのも、ロシアでの史料公開が遅れており、ソ連時代の歴史の全体像がみえていないからだ。その意味では、後継国家であるロシア側にも大きな責任がある。

ようやくロシア側も、このヨーロッパなどを巻きこんだウクライナの動きに遅まきながら対応し、1930年代の史料公開と史料編纂の動きが始まった。昨年11月17日にモスクワでシンポジウムが開かれ、カザフやロシア南部の地域の歴史家たちがそれぞれの地域での飢饉の実態を語った。また『ソ連の飢饉1930-34年』といった史料集も急遽出版された。これからより本格的な4巻本の史料集が出る予定という。

こうして双方の政治的思惑で始まったロシアとウクライナとの歴史論争だが、より大きなスターリン時代の国際的認識をめぐる「真実」の模索につながるなら賛成だ。また、なぜ1950年代末の中国や1990年代半ばの北朝鮮で飢饉が生じたのか。日本にも眠っている多くの史料を発掘・公開することを含め、広く国際交流の全体認識からこの政治化した認識を、グローバルな共通認識にまで高めたいものだ。

しもとまい・のぶお 法政大学教授